

『#熟柿』（佐藤正午著）を読んでみた。著者は北大文学部国文科中退。『永遠の1/2』ですばる文学賞を受賞。『月の満ち欠け』で直木賞受賞。

全編にわたり、読者の不安を掻き立てる小説である。恐々とページを捲ることになる。罪を犯した一人の女性Kの約17年間の人生が描かれている。2008年の秋、熟柿のある家で行われる、人から好かれたことのない叔母の自宅での葬式に参列する。Kは15歳の時に交通事故で両親を亡くし、大学に入学するまでは叔父夫婦の家に引き取られる。警察官の夫と結婚し子どもを身ごもっている。そのことを親戚たちに祝われて、夫には次々に酒を注がれる。ここまでの描写で次に不吉なことが起こりそうな雰囲気が行間に漂っている。

物語が進むうちに、Kはどうも刑務所に入った経歴であることを伺わせる。なぜか？葬式の帰り、警察官の夫が酔いつぶれているためKが新車を運転して帰宅することになる。激しい雨の夜に人身事故を起こしたようだ。それで受刑者になったのだろうか。物語の後半まで轢き逃げ事件となったことは伏せられている。主人公のKは、眠る夫を乗せた車で老婆を撥ね、罪に問われたのだ。真相は、友人からかかってきた深刻な内容の電話に気を取られ、幻影のように道を横断している老女を撥ねてしまう（死亡）。その後、夫から差し出された離婚届にサインをしてしまう。服役中に息子Tを出産するが、出所後に息子に会いたい一心で園児連れ去り事件を起こしてしまう。その結果、息子との接見を禁じられ、追われるように各地を転々とする生活を送ることになる。

葬儀の日、叔母が勧めてくれたように泊まっていれば、友人からの電話に出ていなければ、今と違った幸福な暮らしがあったのではないか。

タイトルの熟柿とは（じゅくし）と読む。熟した柿の実が自然に落ちるのを待つように、気長にその時機の到来を待つという意味があるそうだ。

受刑者としての経歴が付き纏い、職を追われ日本各地を転々とするようになる。そして会いたいのにも息子に会えぬまま十数年が過ぎる。果たして、息子と会うことは叶うのか？そしてKに幸せはもたらされるのか？誰にも起こりうる悲劇、世間の冷たい目。身につまされる。

ひき逃げは、交通事故で人を死傷させた後、必要な救護措置や警察への報告をせずに現場から逃走する行為である。道路交通法上の救護義務違反に問われ、

場合によっては自動車運転過失致死傷罪や危険運転致死罪などの他の罪にも問われる可能性がある。

ひき逃げの罪と刑罰：

- 救護義務違反：

道路交通法第 72 条に基づき、負傷者の救護や危険防止措置、警察への報告義務を怠った場合に適用されます。最大で 10 年以下の懲役または 100 万円以下の罰金が科せられる。

- 過失運転致死傷罪：

自動車の運転上の不注意により人を死傷させた場合に適用される。最大で 7 年以下の懲役もしくは禁固または 100 万円以下の罰金が科せられる。

- 危険運転致死傷罪：

飲酒運転や無免許運転など、特に危険な運転行為で人を死傷させた場合に適用される。負傷させた場合は 15 年以下の懲役、死亡させた場合は 1 年以上の有期懲役が科せられる。35 点の違反点数が加算され、免許取消処分となる。